



廣瀬川

第92号

平成29年
8月30日

仙台市小学校長会

発行者／坂本 憲昭（会長） 責任者／今野 孝一（広報部長）

主張

新しい時代に向かう 仙台市小学校長会

会長 坂本 憲昭（荒町小学校）



国では新学習指導要領が告示され、仙台市では今後5年間の施策の方向性を示す、第2期仙台市教育振興基本計画が策定された。この中で、仙台市独自の取組や特色ある施策を「仙台カラー」と位置付け、仙台ならではの六つの取組を重点的に推進していくことが示された。

いよいよ新しい時代に向けた取組が始まる中、子供たち一人一人の健やかな成長を目指す学校経営の推進と、私たち校長の確かなリーダーシップがますます求められている。

しかしながら、最近の学校に発生する問題については、個々では解決できない問題も多くあり、校長には管理能力のみならず、マネジメント能力が強く求められている。

このような時だからこそ、私たち校長は、子供たちが社会で生きていくために必要な心と力を育てていくことを使命とし、私たち校長自身が率先して研さんするとともに、組織として問題に対応していかなければならない。

そこで、学校経営を担い、充実した教育活動を推進していくために、そのよりどころとして、この仙台市小学校長会の役割がますます重要になってくる。

以前、先輩の校長先生方からこのような話をお聞きした。「仙台市小学校長会は、困ったときに助けてくれる安心感がある。」「校長同士の横のつながりとしての地区会が重要な役割を持っている。」

このような思いを更に実現するために、また、新しい時代に対応できる校長会にするために、昨年度末から、校長会の組織を見直すとともに、これまで慣例的に行っていた例会や研修などの見直しを図ってきた。また、地区会についても単なる情報交換の場ではなく、全市的な課題や、それぞれの校長が抱える問題について協議し、解決する場として位置付けた。さらに、予算の削減や運営の効率化を図るなど、今年度より新しい時代へ向けた仙台市小学校長会がスタートした。

校長会に与えられた使命は大変重いものではあるが、組織として課題を解決する強さと、校長の悩みや思いを受け止めるしなやかさを兼ね備えた組織でありたいと考えている。

今後も、多くの先輩方が築き上げてこられた、仙台市小学校長会の伝統である「共助の精神」を生かしながら、一人一人の豊かな人間力を結集して、仙台市の子供たち、教職員の幸せのために着実に歩みを進めていきたい。

内 容

○主 張	1
○特集「第69回全国造形教育研究大会・宮城大会」	2
○提言「復興に向けた創意ある教育」	3
○学区紹介「地域とともに」	4

○特色ある教育活動	7
○仙台市小学校教育研究会から	11
○退会者からのメッセージ	12
○新任校長所感	20
○編集後記	24

特集 第69回 全国造形教育研究大会・宮城大会

「みる」で輝く子どもの世界
～全国造形教育研究大会を終えて～

永井 一也（南小泉小学校）

昨年11月10日、11日の2日間、仙台において第69回全国造形教育研究大会宮城大会（兼第61回東北造形教育研究大会宮城大会兼第63回宮城県造形教育研究大会仙台大会）が行われました。全国各地から約600名の方々に参加をいただき、1日目に全体会、文部科学省講話、レセプション等を行い、2日目は幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、大学と校種別に各会場に分かれて、公開授業、研究発表、研究協議等を行いました。

小学校は、せんだいメディアテーク、南材木町小学校を会場に10の公開授業を行いました。これまでの取組を土台に、授業者はもちろんのこと研究会の会員全員が図画工作科のこれからの可能性を求め、それぞれの想いを込めた授業公開を行うことができました。また、大会を開催する過程において、中学校の美術部会と連携を図りながら、実践研究を深めることができたことは大変有意義であったと思います。

大会のテーマは「よさや美しさ～つながりの中に生まれるものに向かって～」。このテーマは造形的な創造活動を展開することで、よさや美しさなどのよりよい価値に向かう意思や心情と深く関わる豊かな情操を養うことを指しています。このテーマを各学校種間の共通のものとししました。図画工作科の目標の中に「感性を働かせながら」という文言があります。これは、表現及び鑑賞の活動において、子供たちの感覚や感じ方、創造する力等を重視することだと考えます。

小学校部会ではテーマを、『みる』で輝く子どもの世界とし「みる」ことを大切にしたい表現や鑑賞の活動を展開していくことを目指した実践を進めました。特に視覚に重点を置き、「みる」ことを大切にしたい表現や鑑賞の活動を展開したいと考えました。全体テーマである「よさや美しさ」等のよりよい価値へ向かおうとする意思は「みる」ことで生まれ、広がり、深化していくのではないかと考えたからです。

また、子供の創造性を育む豊かな造形活動は、「つ

ながり」も重要であると考えました。材料と用具の「つながり」、友達との「つながり」はもちろんのこと、地域にある施設、文化、歴史、伝統などとの「つながり」も子供たちの世界を広げるものだと考えます。そこで、様々な「つながり」を活用することを考え、様々な施設や学校外の方々との連携を取り入れた授業を展開しました。

実践授業の内容や質に関しては、参観いただいた方々に評価していただくしかありませんが、このような大きな大会を通して私たちの実践を多くの方々に見ていただき、そして様々なお話を伺うことができたことはとても貴重なことでした。また、講話や研究協議においてこれからの図画工作科の進むべき方向を示していただけたことは大きな収穫であったと考えます。

子供たち、そして私たちも含めて、感性を磨くことがこれまで以上に大切なものとなってきていると思います。感性は磨き続ける必要があります。磨くのを忘れてしまうとさび付いてしまいます。東日本大震災の被災地である当地域にとってはなおさら重要なものではないかと思います。それらの意味からも、今後の図画工作科の果たす役割は非常に重要なものとなると思います。

私たちは様々な機関、様々な人々と共に授業を創造するというスタンスで実践を続けてきました。宮城県美術館と長年にわたって、連携を継続していますし、仙台市博物館とは、博物館ならではの専門性を活かした授業実践を行っています。また、せんだいメディアテークとの連携では、映像を学習活動につなげるプログラムを開発し、カリキュラムに位置付ける実践も行ってきました。今回の全国大会では、その成果の一端を披露することができたのではないかと思います。

今後も、仙台ならではの特色を生かし、各機関と連携を深化させながら、子供たち、そして私たち教員も感性を磨き続け、様々な実践や、子供たちの姿を発信していきたいと考えています。

提言

復興に向けた創意ある教育

人とつながる豊かな心の育成

第2地区会長 安倍 啓司（八幡小学校）

震災後、仙台市は児童の心のケアに努めた結果、幸いにも生徒指導上の課題が噴出する事態だけは避けられたように思う。人と人との絆が見直され、学級づくりや地域連携を通して様々な活動を工夫・実践してきた。それらは本市教育の最重要課題であるいじめ問題への対応にもつながっている。今、本校において復興に向けた創意ある教育の柱は、「人とつながる豊かな心」の育成である。

自他の命を大切にする心や、互いを理解し思いやる態度は、共生社会の土台をなすものである。一緒に遊ぶ仲良しというだけでなく、互いのよさや違いを認め合い、共に目標に向かって協力する仲間づくりに重点を置き、自分らしさを発揮し、自己有用感を高め合えるような学級を目指している。そこで、「みんな仲間 笑顔いっぱい 八幡小」を児童と教職員共通のスローガンとして掲げた。他者への関心や理解は、話し合い活動や協働の集団活動の中から生まれると考え、学級活動の年間時数を40時間に増やした。生徒指導部では月ごとの生活目標と併せて「なかま目標」を設定し、「今月は学級の全員と話そう」

等に取り組んでいる。また、学級目標に「なかま」を取り上げたり、児童会が異学年交流「なかま集会」を計画したりと、学校全体で仲間意識を育てる活動に取り組んでいる。学校支援地域本部を活用し、多様な人々との関わりを経験させる取組も進めている。人と関わり、人とのつながりを実感する活動を通して、連帯感や自己有用感を高め、主体的に生きる力を育んでいきたいと考えている。

子供たちの心を育てるには、先生との人間的な触れ合いが欠かせない。仕事の仕方を見直し、例えばノート点検の回数や作品への評価コメントを10%落としても良いから「週に1回は校庭で子供たちと遊ぼう、教室でおしゃべりに興じよう」と年初の職員会議で指示した。毎週水曜日は18時退勤を原則とした。これらはPTA総会で校長から保護者に直接説明し、理解と協力をお願いした。他にも会議の簡素化や校内研修の見直し（回数を減らし指導案を簡略化）などを進めている。容易ではないが、教育復興の担い手を疲弊させないことも校長の責務だと自身に言い聞かせている。

提言

復興に向けた創意ある教育

「心の教育の充実」を目指して

第4地区会長 高橋 隆子（桂小学校）

私たちは大震災の体験から、「命」や「生き方」の大切さを学んだ。「人としてどう生きるのか」自己の生き方を見詰め、自分なりに考え判断し、よりよく行動できる力を伸ばしていくことは、これからの時代を生き抜く子供たちにとって極めて重要なことである。

本校では、道徳を研究教科とし、学校経営の柱である「心の教育の充実」を目指している。その具体は、互いの信頼関係を基盤として「安心できる」「認められた」という心のエネルギーを高めながら、社会的能力（自己表現力、状況判断力、問題解決力、親和的能力等）を培うことにある。研究のキーワードは、「対話から深める学び」と「桂小版ループリックの作成」である。「対話・ダイアログ」は、異なる視点からの考えや疑問が共有され、重なり合い、一人だけでは気付くことができない多様な側面から物事を吟味していくことを可能にする。問題探究的学習の指導過程では、子供が立てた「問い」を中心に、何を話しても否定されないという知的な安心感

（セーフティ）を大切にしながら、対話を通して道徳的価値についての学びを深めていく。子供たちが協働して考え続け、自分なりの解決を見いだすプロセスを繰り返すことで、「命は私たちがつないでいくもの」「周囲の人との関わりを意識して生活することが大事」「未来の子孫にも幸せになってほしいという願いを持って生活する」（6年「生命の尊さ」）などのように、物事を多面的・多角的に捉えようとする子供の姿が見られるようになってきた。「対話」を重視した実践の先には、異なる考えを分かち合うコミュニティが構築されていくことから、いじめの未然防止にも役立つと期待できる。

道徳科の評価に取り組むに当たっては、評価観の転換が必要である。何のために行う評価なのか熟慮しなければならない。本校独自のループリックについて検討・作成を重ねながら、心の成長を実感できる子供の育成に努めたい。「生きることの意味」を自分事として問い続ける子供たちが、他者と力を合わせて豊かな未来を切り開いていくと信じている。

提言

復興に向けた創意ある教育

「仙台伝承七夕」に学ぶ

第6地区会長 高橋 克仁（古城小学校）

本校では、平成22年度から「仙台伝承七夕の会」や地域の方々の御協力をいただいて、5年生が「仙台伝承七夕」について学ぶ活動を行っている。

主な学習の流れは次のとおりである。

- 1 「仙台伝承七夕の会」の方の講話を聞き、七夕について興味・関心を持ち課題設定をする。
- 2 学習計画を立て、様々な方法で課題を追究する。
（ミニ七夕飾り作りを含む）
- 3 分かったことをまとめ、互いに伝え合う。
（参観日に保護者に公開）
- 4 地域へ発信する。

震災以後は、「自分たちの作品を見ることで地域の人に元気になってもらいたい」との願いを込め、作った



ミニ七夕飾りを市民センターや地下鉄河原町駅、JR長町駅、宮城刑務所などに展示してきた。さらに、27年度は荒浜小学校、28年度は東六郷小学校と、



閉校を迎える同じ若林区内の小学校に贈った。

本校は、仙台藩祖伊達政宗公が晩年を過ごした若林城跡の一角に建つ。政宗公は、七夕に関する和歌を8首詠んでいる。政宗公も愛した仙台七夕についての学習を深めることで、由緒ある地域に誇りを持ち、地域や伝統を愛し、自他の幸せを願う子供に育てていきたいと思う。

今年の短冊にも、人々の幸せや震災からの復興を願う言葉が多く書かれている。

学区紹介 地域とともに**「天沼」を介した
地域とのつながりを大切に**

早坂 忠好（金剛沢小学校）

金剛沢小学校は、昭和49年に仙台市55番目の学校として開校しました。当学区は、仙台市の南西部、桜と古墳で知られる「三神峯公園」に近接した丘陵地帯にあり、豊かな自然環境に恵まれた閑静な住宅地です。金山、金剛沢などという地名は、その昔三神峯一帯を中心とした金の産地に由来しているとも言われています。また、南斜面に位置した学区内はその昔、藩の御料場であった地域です。そして東原の沢に添った周辺にはかつて溜め池が多く散在していました。その中で現存する沼の一つが天沼です。天沼は、現在「親水公園」として地域住民の憩いの場となっており、地域住民による沼の清掃活動が定期的に行われています。

この「天沼」は、本校にとっては生活科や総合的な学習の時間の格好の学習の場となっており、年間を通して活用しています。具体的には、1年の生活科「天沼であそぼう（春編・秋編・冬編）」、2年の

生活科「春・夏・秋・冬をさがそう」の単元で観察を中心に活用しています。また、総合的な学習の時間では、3・4・5年生が「天沼の自然」、「天沼の環境」、「天沼公園のバリアフリー」をテーマとして学習しています。

さらに、地元の社会福祉法人や西多賀地区連合町内会、西多賀商店街振興組合などの方々が設立した『天沼公園愛護協力会』の活動にも、児童やPTA会員が参加しています。EM菌による天沼の水質浄化や環境保全の活動を通して本校児童の環境に対する知識や意識が高まっています。

「ホタルが住めるような昔の沼にしよう。」と立ち上がった方々の願いが通じ、天沼は夏には蛍が舞う光景が見られるほどすばらしい「親水公園」となりました。地域の方々の沼にかける思いや姿勢も本校児童にとっては貴重な学習の素材となっています。

本校では、これからもこの「天沼」や関連する活動を通して地域とのつながりを大切にし、子供たちが心豊かで健やかに育っていける教育活動の推進を図っていきたいと考えています。

学区紹介 地域とともに

郷土愛に支えられて

三浦 敏光 (福岡小学校)

泉ヶ岳の麓にある全校児童数が40人の本校は、明治6年に第18番福岡小学校として開校した歴史と伝統のある学校です。児童のほぼ全家庭が代々地元で暮らしているため、学校に対する愛着は熱いものがあり、たくさんの地域の皆さんに支えられています。学校も、地域の伝統を重んじ、文化や風習を大切にして教育活動を展開しています。

その最たるものが、県指定民俗無形文化財「福岡の鹿踊・剣舞」伝承活動です。「福岡の子供に自信を持たせたい」「ふるさとを愛する気持ちを育てたい」と当時福岡小学校に勤めていた地元出身の先生の働きかけで、昭和50年から子供たちの伝承活動が始まりました。現在も5・6年生が、保存会の皆さんから踊りに対する心と技を年間30回指導していただいています。毎年、青葉まつりや冠のふるさと伝承まつり、地元の老人ホーム等で発表しながら福岡の伝統を引き継いでいます。

また、低学年児童が、地域ボランティアの方に、梅干し作りを教えていただいています。7月初旬の梅もぎから、天日干し、赤じそでの漬け方までを昔ながらの方法で指導していただいています。そして、12月には、子供たちが手間暇かけて作った梅干しが入ったおにぎりでもパーティを開き、収穫の喜びを味わっています。

小正月の時期には、今ではほとんど見かけなくなっただんごさしの行事を、低学年児童が福岡地区に伝わる方法で行っています。福岡地区では、2m～3m位のミズキを柱に結び、小判、米俵、鯛、恵比寿、大黒などの飾りを吊るしてこの年の五穀豊じょうや家内安全、商売繁盛を願います。子供たちは、白玉粉で紅白の団子を作り、小さく丸めてミズキに飾り付けをしながら由来を学んでいます。

このように年間を通して地域の方に深く関わっていただいている学校です。学校に対する福岡地域の万古不易な熱い思いに応えながら、これからも地域の伝統や文化、風習を大切にしていきたいと考えています。そして、地域を愛する子供を育む教育活動の更なる充実を図っていききたいと思っています。

学区紹介 地域とともに

震災を語り継げる子供を育てる

南條 智重 (福室小学校)

修学旅行で6年生の子供たちが、中尊寺で各地から観光に訪れた人たちに手作りのパンフレットを渡し、宮城県の紹介をする活動を行いました。一つのグループが声を掛けたのは60代の男性二人、神戸の方でした。自然と震災の話になり、「被災地としてお互い頑張りましょう。」と励ましてもらいました。また別のグループは、埼玉から家族で訪れていた男性の方からこんな質問を受けました。「震災の時はみなさんはどうでしたか。」「とても揺れたので怖かったです。」と答えた子もいれば「小さかったのでよく覚えていません。」と答えた子もいます。6年生の子供たちは震災の時は幼稚園の年中でした。6年経った今でも全国の方は、仙台が東日本大震災の被災地として甚大な被害を受けたことに心を痛めてくれていることがよく分かりました。そして子供たちの記憶には大きな差があり、その時の状況や経験を言葉で伝えることが難しいことにも改めて気づき

ました。

福室小学校区では、毎年11月に地域の防災訓練を実施しています。防災リーダーを中心とした避難所運営の訓練は消防局からも高い評価を受けており、28年度は宮城野区総合防災訓練の会場にもなりました。しかし、私には気になっていることがありました。子供たちや保護者の参加が非常に少ないことです。そこで今年度は、11月18日土曜日を授業日とし、学校と地域で合同防災訓練を行うことにしました。保護者や地域の方々に防災の授業を公開し、引渡訓練を行います。同時に体育館では、避難所開設訓練を行い、保護者と地域の方々に参加してもらいます。

今後震災を経験していない子供たちにも「自助」「共助」の力を育み、さらに被災地が震災で学んだことを語り継げる力を育てていくことは学校と地域の使命であると考えています。この防災訓練が命を守る行動を身に付けるだけのものではなく、東日本大震災で起きた様々な事実や教訓、人々の思いを地域の方々から受け継ぐことができる訓練となるように地域の方々と一緒に考えていきたいと思っています。

学区紹介 地域とともに

小・中・地域連携による
防災訓練

工藤 昌裕 (大和小学校)

去る 6 月 24 日 (土)、蒲町中、蒲町小、大和小を会場に総合防災訓練が行われた。

計画に当たっては、3 校の防災主任が中心になり、発災を午前 8 時に統一してそれぞれが立案した。

本校を会場とした大和地区総合防災訓練については、今年も、連合町内会、各町内会、体育振興会、民生委員児童委員協議会、交通安全協会、包括支援センター等、地域の諸団体と仙台市中央卸売市場、若林区区民生活課、同衛生課、指定動員等の関係機関、そして蒲町中、大和小PTAの方々においでいただき、5 月の事前打ち合わせを経て実施した。

訓練当日午前 8 時の発災後、地域の方々、蒲町中の生徒、本校の児童が各地区の避難所に集合し、一緒に本校校庭に向かう。本校を卒業した中学生も加わっているので小学生にとっては互いに知っている顔も多く、安心感が一段と増しているように感じた。

校庭に全地区が到着した後、本校の児童は学級毎

に出欠確認を受け再び地区毎に集まる。そして各地区の顔合わせを、中学生の進行により、次のように行った。

1 リーダー紹介：町内会長さんと町内会の防災担当者、中学生のリーダー（プラカードを持って先頭で一次避難所へ移動する生徒）の顔と名前を覚える。

2 町内会長さんのお話

3 各地区避難所の確認：場所と経路を確認。

児童にとって、隣近所の方々を知ってはいいても、町内会長さんや災害時等にお世話になる防災担当の方の顔や名前までは知らないことが多い。

このような方々を覚えるだけでもこの訓練には大きな意義がある。

引き続き学級毎に、仙台版防災教育副読本「3.11 から未来へ」を用いた授業を参観していただき、並行して炊き出し訓練や避難所開設役員会訓練も行い、最後には引き渡し訓練を実施した。

これからも、地域の皆様、関係機関の方々、近隣校の先生方と「顔の見える関係」を大切にしながら防災を始めとする諸活動に取り組んでいきたい。

学区紹介 地域とともに

地域の元気と笑顔のために

白井 剛次 (四郎丸小学校)

本校学区境に、伊達政宗の命により創建された落合観音堂があります。ここには蟹の絵馬がたくさん奉納されています。その昔、名取川の洪水の際、観音菩薩像が流されそうになったとき、無数の蟹がそれを救ったといういわれによるもので、「蟹伝説」として今に伝えられています。

過日、本市で開催された日本PTA全国研究大会開会行事アトラクションにおいて「かにっこ和太鼓」を発表する機会をいただきました。

震災時の避難所運営を通して、学校と地域がつながることの大切さを改めて感じ、そのために何か取り組めるものはないかと地域で話題になりました。そんな折、学習発表会での和太鼓演奏を地域の多くの方々が喜んで見ている姿がありました。和太鼓の響きは地域の人を元気にするはずという思いから、この地域の三つの小学校で「和太鼓」に取り組むことになりました。学校、地域支援本部スーパーバイ

サー、PTA、地域住民で話し合いを進め、市内の民族歌舞団に作曲を依頼し、平成24年10月に「かにっこ和太鼓」が誕生しました。年を重ねるごとに発表する機会も増え、地域だけでなく、市のイベントにおいても演奏を依頼されるようになりました。

本校 4 年生の総合的な学習の時間では、「地域とつながる」をテーマに学習を進めています。その中で、この「かにっこ和太鼓」を取り上げ、誕生した経緯を学び、まとめとして、学習発表会で演奏しています。この学習を通して興味を持った子供たちは「かにっこ和太鼓隊」に入って活動することも少なくありません。

震災を機に誕生した「かにっこ和太鼓」は、演奏の前に「地域の皆さんを元気にしたい」「地域の皆さんの笑顔が見たい」をコールすることに大きな特徴があります。震災を風化させず、学校と地域とのつながりを更に深め、地域に元気を発信していくという「かにっこ和太鼓」に込めた思いを大切にし、これからもこの活動を充実させていきたいと考えています。もちろん、「かにっこ」は、「蟹伝説」から名付けたものです。

特色ある教育活動

地域の特性を最大限に生かした教育活動

玉手 克彦（大倉小学校）

本校は、仙台市の北西部に位置し、山とダムが近くにあり、緑豊かな自然環境に囲まれています。学区が広いので、全児童はスクールバスでの登下校です。子供たちは、それぞれ家の近くからバスに乗り、学校の昇降口近くで降ります。決まった時刻に登校してくるので、昇降口で迎え、スクールバスから降りてくる子供たちとハイタッチをしながら挨拶を交わしています。子供たちの元気な声が響いて、大倉小の一日がスタートします。

帰りは決まった時刻にスクールバスが来て、6 時間の日でも午後 3 時 30 分には全員下校となります。そのため、放課後に思い切り遊んだり運動したりすることができないのです。こういった状況から、恵まれた環境でありながら、運動不足や体力低下が懸念されてきました。そこで、数年前から、朝の活動として全校で走る「倉っ子マラソン」や縦割りで遊ぶ「生き生きタイム」に取り組むことになりました。今ではすっかり定着し、毎日継続している成果が現れて、子供たち一人一人、確実に体力が付いてきているのが分かります。

「強くあかるく潑刺と共に楽しく助け合う」と校歌の歌詞にあります。全児童 15 名は、毎日元気いっぱい、明るく学校生活を送っています。また、全校で取り組む行事や活動では、リーダーの 6 年生を中心にしっかりまとまって大きな力を発揮します。保護者・地域の方々は、学校にとっても協力的で、学校行事関係でお手伝いをしていただいたり、校庭の草刈りをしていただいたりしています。地域とのかかわりが多く、子供たちが参加している伝統的な行事がたくさんあります。

なかでも学区民運動会は、まさに地域を挙げての大運動会です。敬老会の方には、たくさん参加していただいています。運動会は午後まで実施し、お昼は町内会毎に子供たちと保護者、そして地域の方々も一緒になって食べます。見ていてとてもほほえましい光景です。

地域の大きなお祭りである「定義祭り」や「倉人祭」では、たくさんのお客さんの前で、「定義太鼓」

を演奏したり、「御神楽」を踊ったりします。終わったあとは、会場から盛大な拍手と温かい声掛けがあり、やりきった子供たちは達成感を味わうことができます。

今年は「定義ホタルまつり」にも参加しました。地域の方々や遠くから定義へ来ていただいたお客さんの前で、5、6 年生が総合的な学習の時間でホタルについて調べてまとめたことを発表したり、みんなで『御神楽』を踊ったりしました。暗くなってからは、たくさんの人たちとホタルの観察もできました。

毎年実施している「大倉川・大倉ダム、水、仙台白菜」の学習では、浦戸諸島の野々島に校外学習で出掛け、浦戸小中学校とも交流を図りながら学んできます。仙台白菜の学習では、実際に種取りをし、いただいた種を学校で植えて育てます。育った仙台白菜は、給食の食材として使われ全校で収穫を祝いながら食べます。

大倉ダムは学校の目の前にあるので、ダムについて調べたり、校外学習で見学したりしています。また、ダム周辺の清掃活動も全児童が参加し、身近なところで実践できる環境活動を行っています。

もうすっかり定着した「交流学习事業」は、平成 23 年度から実施しています。小規模校児童生徒の学び合いとして、上愛子小、作並小、大倉小の 3 校で、4～6 年生が年に 6 回実施しています。内容としては、合同授業を行ったり、合同で校外学習に出掛けたり、広陵中学校と一緒に授業を受けたりします。交流学习を通して、より多くの人々とかかわりを持ち、学び合う楽しさを体験させることができます。交流が有意義であることが確認できたことから、今年度は 1～3 年生の交流も実施する予定です。

行事以外でも、大倉を会場として行われる各種の体験活動には、子供たちも積極的に参加し、ほかの学校の児童生徒と交流を深めています。

小規模校の強みとなる特色ある教育活動を最大限に生かし、重点目標である「互いに高め合う子供たちの育成」を目指していききたいと思います。

特色ある教育活動

読書にふれ、心を豊かに育てよう

村田 隆則（桜丘小学校）

1 協働型学校評価の重点目標設定

本校では、平成27年度まで「あいさつの励行」と「読書活動の推進」の二本立ての重点目標設定でした。しかし、児童の学校生活を見ていて「心の成長を図ること」が急務であると考えました。そして翌年度から到達目標を「感性豊かで心優しい子供の育成」とし、重点目標を「読書にふれ、心を豊かに育てよう」と掲げて実践することにしました。

2 具体的な取組

(1) 学校での取組

①読書賞、多読賞の設定

年間30冊以上読書した児童に「読書賞」を、また100冊以上読書した児童に「多読賞」を出すことにしました。更に読書の質を高めるため、国語教科書に紹介されている図書を「学年必読書」と設定して5冊以上読むこととしました。

②読書タイムの設定

毎週2回、朝に読書タイムを設定し、好きな本を読む時間としました。教員も一緒に読み、学校全体が本の世界に入り込む時間になるよう心掛けました。

③児童による選書

図書室に購入する図書を児童が自ら選書する機会を設け、児童が読みたい本を購入することとしました。

④図書委員会による行事

図書委員が活動の一環として「図書デー」等の行事を企画運営し、図書室利用を促しました。

(2) 家庭での取組

①親子読書の日の設定

毎月第二日曜日を「親子読書の日」とし、「20分間はテレビを消して静かに読書」「家の人皆でゆったり読書」「本を話題に親子の語らい」の三つの願いと共に各家庭に呼び掛けました。

②PTAによる学級文庫づくり

PTAバザーの収益金から20万円支出いただき、各学級から希望の出された図書を購入して「PTA学級文庫」を作り、いつでも本が身近に

ある環境を作りました。

(3) 地域の取組

①読み聞かせボランティアの活動

本校では、平成10年頃から地域の方々による読み聞かせボランティアが毎週木曜日に活動しています。朝の読み聞かせを継続してお願いし、本の世界に浸る機会を設けました。

②市民図書館との連携

市民図書館から年間4回「朝読書パッケージ」の貸し出しを受けて各学級を巡回させました。また、4年生の学習で、図書館職員がブックトークに来校して、読書の楽しさを教える活動を行いました。

③地域の皆さんによる「本の紹介」

連合町内会役員の皆さんにお願いして、子供の頃に読んだ本を紹介いただきました。図書室前に掲示し、地域の身近な方々のことを知る機会としました。

3 取組の成果とこれから

このような取組を通して、昨年度読書賞を受けた児童は全校児童の69.3%でした。また、多読賞は21.6%、必読書に関係なく30冊以上読んでいる児童は82.9%でした。図書館の総貸出冊数も前年度と比較して5.8%増加しました。

今後は、(1)読書の質を高める必読書の設定、(2)仙台市子ども読書活動推進計画（第三次）を生かした目標設定、(3)読書環境の更なる改善を目指した取組の継続をしていきたいと思っています。

4 おわりに

協働型学校評価の到達目標に「感性豊かで心優しい子供の育成」を掲げ、読書活動を通して児童の心を耕してきました。それは、以前御指導いただいた校長先生から「優しいという字は優れているとも読む、だから優しい人は優れているのだ。」という言葉がきっかけでした。私は校長として、桜丘小学校の児童は心優しい人であってほしいと願っています。読書を通して、心を豊かにし、優しく優れた大人に育てていきたいと考えています。

特色ある教育活動

3,000人の総合防災訓練

佐藤 哲郎（新田小学校）

1 はじめに

東日本大震災から6年半が経過した。新田地区は、震災当時、大変な状況の中においても比較的スムーズな避難所運営、相互扶助がなされていたとのことであった。その要因として、震災以前から繰り返して行ってきた地域ごとの小規模での訓練を通し、互いの顔がつながっていたことがあげられている。

一方、本地域は、現在もまだ人口が増えており、児童数は1,160名に、地域総人口も16,000名を超えている。このような中、更なる防災への意識強化、また、より地域が一体となった総合防災訓練の必要性の声が高まり、平成27年度から毎年6月の日曜日に、小学校を会場に、地域を挙げた大規模な防災訓練を実施している。

2 総合防災訓練当日の日程

児童・保護者は、授業参観と引き渡し訓練を行い、その後親子で防災訓練に参加。また地域住民は各地域で一次避難訓練を実施した後に学校に参集し、防災訓練に参加となっているため、以下のような日程で訓練が行われた。

児童・保護者の動き	地域住民の動き
8:45 授業参観	8:00 地震発生
~9:30 「防災の授業」	町内ごとに一次訓練
9:40 地震対応訓練	(初期消火、負傷者救出等)
10:00 引き渡し訓練	9:30 学校に集団避難
10:20 防災プログラム体験学習	防災プログラム体験
11:45 全体での閉会式	

3 学校としての取組

(1) 防災の授業

全クラスともに学級活動「グラッときたら」を主題に学年ごとに指導内容を統一し授業を行った。

例えば3年生では、「家にいたときに地震が起きた時にどうすればよいか」を考えさせた。また、6年生では危機予測や減災について考えさせる授業を行った。



【4年生授業の様子】

(2) 引き渡し訓練

授業参観後は授業時間中に地震が発生した想定での訓練を行った。その後、引き渡し訓練を行い、引き続き、親子で、校舎内や校庭に設定された各種防災プログラムを体験した。



【引き渡しを待つ保護者】

4 防災プログラム体験学習

本総合防災訓練は、各関係機関（区役所、消防署・消防団、交番、交通安全協会、防犯協会・防犯指導隊）、東仙台中、父母教師会等に協力要請して行っているもので、その内容は、初期消火訓練や仮設テント・仮設トイレの設置、応急救護訓練、非常炊き出し訓練、災害時給水栓使用訓練、屋上



【防災プログラム体験中】

のプール水を使用した消火バケツリレー訓練等である。また、消防署による濃煙体験や放水のデモンストラーションのほかに日本赤十字社や蔵王自然の家による防災プログラム等も用意されている。地域住民は学校への避難移動訓練が終わると同時に、これら各種のプログラムに参加していた。また、児童は親子一緒にスタンプラリー形式で、多くのプログラムを体験することができた。



【訓練全体の様子】

5 成果と今後に向けて

3回目を迎えた総合防災訓練は、過去2度の反省を生かし、スムーズに行われるようになってきた。児童・保護者は毎年一斉に行われる授業を通して災害への心構えや、災害時の対応を親子で学ぶことができています。また、地域の方々も二次避難所としての学校の存在を改めて重要視している。

今後は地域の方々にも授業を公開することや、体験学習を親子と地域住民が一緒に行うこと等も検討する必要があると感じている。また中学生のリーダーシップの下、高学年児童がより主体的に地域防災活動に関わる方策等も視野に入れたと考えている。

特色ある教育活動**地域の教育力を生かし、地域とともに歩む学校を目指して**

高橋 純子（長町南小学校）

1 はじめに

本校の学区は太白区の中心に位置し、近隣に区役所や地底の森ミュージアムなどの公共施設が整っており、大規模商業施設も隣接している。地下鉄南北線等交通の便も良く、生活に便利な地域なので、マンションなどの集合住宅も多い。平成2年に開校した、まだ歴史の浅い学校ではあるが、地域の方々の子供たちに対する思いは深い。地域の教育力である「ひと・もの」を生かし、地域とともに歩む学校としての教育活動を進めているところである。

2 学校支援地域本部「みなみのわ」との連携

平成27年度の9月に立ち上がったばかりの学校支援地域本部であるが、3名のスーパーバイザーを中心に活動している。人材バンクには50名ほどの登録があり、学校の力強い応援団となっている。

継続的なアシスト活動としては、小1生活学習サポーター、放課後や休み時間の見守りサポート、読み聞かせボランティアなどを行っている。学年の求めに応じて、授業や校外学習や野外活動などでも、支援していただいている。また、プールの清掃、学校花壇の整備補助など、子供たちのためにと、汗を流しての活動も快く引き受けていただいている。

平成28年度には、地域教育協議会を立ち上げ、地域の他の団体とも連携を図り、活動の充実を図っている。さらに、本年度からは、長町中学校の学校支援地域本部とも連携し、情報交換や人材交流等の連携体制ができ上がりつつある。

3 諸団体との連携**(1) 体育振興会との連携****①学区民大運動会**

運動会は体育振興会との共催の学区民運動会である。本年度は、地区ごとの応援合戦を取り入れたり、地域ごとに帽子に色テープを貼ったりして、子供たちの地域への所属感を高めるようにしたところ、綱引きや地区対抗リレーの応援で、今まで以上の盛り上がりが見られた。また、児童全員が参加できる種目を設けるなど種目にも工夫を凝らした。子供たちが主体となる運動会を目指して改善が図られている。

②長町南サマーフェスティバル

体育振興会主催の夏祭りは、町内会や地元商店会も協力し、出店やスポーツコーナー、音楽の広場や打ち上げ花火など、子供たちが楽しめるように趣向を凝らした内容になっている。

(2) 親児サークルとの連携

本校の親児サークルは、「出来ることを、出来る人が、出来る時に」をモットーに、我が子ばかりでなく地域

で子供たちと触れ合う機会を作ろうと集まった保護者のサークルである。様々な防災体験をする「防災お泊まり会」や、野菜の作付けから収穫までを体験する「親児農園」、正月行事を楽しむ活動のほかに運動会のテント設営や側溝の土砂上げ作業等の奉仕作業まで、幅広く学校に協力いただいている。

(3) 地底の森ミュージアムとの連携

地域素材（施設）である地底の森ミュージアムでは、季節ごとに森の探検をしている。また、古代米の田植えや稲刈りも体験させていただいている。

4 長町中学校区での学びの連携

長町小、鹿野小、長町南小、長町中の4校で学びの連携事業を推進し、地域連携・防災教育連携部会、教科・領域連携部会、生徒指導連携部会に全教員が所属している。「9年間で育む子供の姿」として、「望ましい社会性を身に付け、主体的に判断・行動できる児童生徒」を目指している。学習のきまりとして、「話の聞き方を身に付ける」や「チャイムと同時の授業開始」の共通目標も設定している。また、「チーム長町プロジェクト」として、長町中学校生徒と合同で、定期的な挨拶運動と被災地訪問を行っている。

5 おわりに

本校の特色ある活動は、多くの「ひと・もの」に支えられている。今後も子供たちのより良い成長のために、多くの保護者や地域の皆様に関わっていただけるような教育活動を積極的に行っていきたい。

仙台市小学校教育研究会より

学び続ける教師のために

仙台市小学校教育研究会 会長 堤 祐子 (立町小学校)

本市の教育施策の方向性を示す「仙台市教育振興基本計画」は、昨年度、第2期の基本計画を策定し、この4月からそれにのっとった様々な取組が進められている。今回は、“仙台カラー”ということで、仙台ならではの施策を打ち出しているのが特徴と言える。基本的方向4「教育環境」では、仙台市が求める教員の姿や力量を明らかにし、研修体系の再構築がうたわれている。その要因として、今後更に加速する教職員の世代交代や急激な社会変化の中で、学校現場が直面する複雑化・多様化した課題への対応が急務であるということが考えられる。

1 時代とともに歩む仙台市小学校教育研究会

昭和39年3月に施行（平成21年4月一部改正）された「仙台市小学校教育研究会会則」に目を通してみると、第3条に「仙台市小学校教育振興のため各部会の連絡提携をもとに、研究活動の推進をはかることを目的とする。」とある。

本年度、各部会から出された研究主題を見ると、時代の流れを的確につかみ、次期学習指導要領も視野に入れたすばらしいテーマが並んでいる。これも各教科等の部会長である校長先生方が、日々、仙台市の小学校教育振興のために研さんを積まれ、強力なリーダーシップを発揮していただいている成果と実感している。

また、本研究会の最大の強みである実践を通しての研究活動は、授業提案をしていただく先生方を支える所属校の校長先生始め教職員の皆様、部会の先生方というマンパワーの結集で、毎年、すばらしい実績を積み上げている。10月27日（金）～28日（土）には、視聴覚部会が、「第21回視聴覚教育総合全国大会・第68回放送教育研究会全国大会」仙台開催を控え、実践研究にも一層熱が入っているところである。

さらに、本年度は、学校行事部会が特別活動部会と合体しての1年目である。組織づくりや運営面で部会長の畠山校長先生（鶴谷東小）には、御苦勞をおかけしているが、こちらも順調な滑り出しを見せ

ている。

一昨年度からの会報のスリム化を始め、仙小教研は、“今、目の前にいる子供たち”をしっかりと見据えながら、代議員会や理事会等を通じ、会員の意見を吸い上げ、時代に合ったより良い会の運営になるよう努力している。

2 より一層実りある講演会を目指して

ここで、年に1回開催されている講演会について触れておきたい。先生方に幅広い教養と広い視野を育てていただきたいという目的で開催されている講演会も仙台市小学校教育研究会では大きな柱の一つである。

平成14年度から仙台市中学校教育研究会と合同で隔年実施してきた講演会は、平成26年度に宮城教弘塾と共催になり、平成27年度からは、新規事業「教育文化講演会in仙台」としてリニューアルし、本年度3回目を迎えることになる。

去年は、講師にアグネス・チャン氏を迎え、「私のターニングポイント」というテーマで講演をいただいた。親しみやすいキャラクターと、タレントとしてだけではなく、ユニセフ大使としても幅広く活動している体験談は、会場に集まっていた先生方にも新たな視点を示唆する貴重な機会となった。

本年度は、明治大学文学部教授の齋藤 孝先生をお招きして、「人間関係をつくるコミュニケーション力」と題して、御講演をいただく予定である。今日的課題を参加者全員で共有するという点では、有意義な時間になるであろう。

3 おわりに

前述したように、仙小教研は、時代に即した研究会の進み方を意識しているが、昨今の教育現場の多忙化を見ると、まだまだ改善の余地はある。一例を挙げれば、常任委員などを始め、組織のスリム化や事業の見直し等である。引き続き、校長先生方の叡智をいただきながら、改善等にも取り組んでいく。

退会者からのメッセージ

後 輩 に 期 待 す る こ と



伝え、繋いでいきたいこと

古澤 康夫 (前 上杉山通小学校)

「天災は忘れた頃にやってくる」物理学者で文学者の寺田寅彦が残した戒めの言葉です。東日本大震災から早くも6年の月日が流れました。私たち大人も日常の忙しさに紛れ、あれだけ大変だった日々の記憶も薄れがちで確実に風化が進んでいます。

これから入学してくる子供たちは、間違いなく東日本大震災を知らない子供たちになります。新たに採用となる教職員の中にも、当時県内にいなかった人も出てきます。

そのような学校現場の中で、東日本大震災を経験して得た、自助・共助の重要性をしっかり伝えつないでいく必要があると思います。近い将来、首都直下型や南海トラフ地震等の災害が想定されています。その他、豪雨や土砂災害等への備えも欠かせません。一人一人の子供に防災対応力を身に付けさせることが、震災を経験した私たちの責務ではないでしょうか。

改訂予定の新学習指導要領には、ポイントとして、アクティブ・ラーニングのほか、英語科の新設や社会に開かれた教育課程などが掲げられ、新しい教育の波が次々と押し寄せてきています。忙しさに流されることなく、目の前の子供たちにとって何が大切なのか、何が必要なのか、しっかりと見極め、学校経営を進めていきたいと思っています。

校長の務め

成田 忠雄 (前 片平丁小学校)

この春、38年の教職生活を終えることができました。お世話になったたくさんの方々に、改めて感謝をしたいと思っています。あれから3か月余りが経過しましたが、本棚や物置に雑然と積み重ねられた様々な資料や写真等を少しずつ片付けながら、今、気持ちの整理をつけているところです。

6年前の震災の時は、ちょうど行政勤務をしていました。所属していた部署で何度も学校を廻り、被災状況の把握や学校再開の準備をさせていただきました。その際、いずれの学校でも、校長が先頭に立ち、身を粉にして、子供や保護者、地域のために尽くしている姿を目の当たりにしました。果たして自分にできるだろうか、自分だったらどこから手を着けるだろうか、いつも私は自問自答しておりました。

この震災を経て、私たちは改めて校長に求められる的確な判断力であるとか、責任の重さということを学んだはずです。ある意味、校長は孤独です。最後は自分で判断し決断を下さなければなりません。普段から職員との意思疎通を図りながら、地域との連携を大事にし、子供たちの安心・安全を守っていく。その大前提の上で、笑顔のあふれる学校を創っていくことこそが校長の務めだと思います。後輩の校長先生方の御活躍を大いに期待しております。

見極める力

原 修造 (前 秋保小学校)

東日本大震災が起きた平成23年度に入学した子供たちが、今年29年3月に卒業していきました。月日が経つのは早いものだとつくづく感じています。

さて、この6年間で防災教育はどのように変わってきたか考えてみました。地震を想定した訓練が、当初は多く実施されていたと思います。しかし、この地域は、地震の影響を受けていなかったため、訓練実施への気運が上がりませんでした。その後、洪水被害や崖崩れ等の災害があつて、それらの災害にも対応する防災教育に変わってきています。この地域特有のクマやイノシシの危険動物への対応なども必要です。防災教育も様々な状況を踏まえながら進めるようになってきています。

また、学校は指導要領の改訂により、大きく変わろうとしています。道徳や外国語活動の教科化、そして3、4年生への外国語活動の追加などがありま

す。生徒指導では、いじめ問題や不登校対策などの問題を抱え、学校は、目まぐるしい状況にあると思います。

大きく変化する教育現場ですが、児童が健やかに成長するために、「何が必要なことなのか」を見極める力を校長は身に付けなければならないと思っています。児童や地域の実態を押さえて、校長先生方の力を発揮してください。

地域とともに

泉 洋子（前 馬場小学校）

私が馬場小学校で過ごした4年間、児童数は急減し、現在は児童35名の小規模校です。私は校長としてこの現実にしっかりと目を向け、地域の教育力を学校経営に生かしていく、そのためには、自分から地域へ出ていこうと決めました。

まずは、毎朝校門で子供たちを出迎える。放課後は話をしながら一年生を家の近くまで送り届け、その途中では地域の人たちと挨拶や会話を交わす。しばらくたった頃、車で通勤する地域の方から会釈され、そのような方々が日増しに増えていきました。当時はもちろんだなたのかは存じませんでしたが、今本校の教育に多大なご支援をくださっているのは毎朝会釈を交わした方々です。東日本大震災でもほとんど被害がなかった地域ですが、地域の安全マップづくりや地域防災訓練などでは、地域の方々が活躍してくださいました。こうして地域の方々の得意分野を生かした御支援により、子供たちは地域に誇りを持ち、自己有用感を高め、自分の力を十分に発揮し、生き生きと学校生活を送るようになりました。

学校経営の基盤である「地域とともに子供たちを大切に育てていく学校」づくりのために、保護者や地域の方々との信頼関係をより強固なものにし連携をしっかりと保つことがとても大切なことだと実感しています。

先生方を元気に

伊藤 八十二（前 湯元小学校）

先生方が元気でないと、結局は子供たちをよく育てることもできません。ところが、昨今では、ベテランの先生方でも疲弊しているのが現状ではないでしょうか。あまりにもたくさんのことが現場の教師の肩にのしかかっています。

新教育課程、いじめ防止、配慮を要する児童や保

護者への対応、そしてこれらを担う経験の少ない先生方の増加など喫緊の課題が山積。加えて、説明責任がますます求められ、各種の調査、アンケートが次々に実施され、その分析や説明、指導で放課後の時間確保もままならない状況。どれもこれも必要なことなので先生方は頑張るしか仕方がないのが現状です。

こういう時代だからこそ、先生方の味方になって学校を支える支援者が必要だと思います。学校版シルバー人材センターがあれば登録したいとも思っています。現場にとって役に立てる、しかし、邪魔にはならないという今の私のような立場で、私のように考える退職者は、きっとたくさんいらっしゃることでしょから、御活用いただければWin-Winの関係になるのではないのでしょうか。

皆様のますますの御活躍を祈念し結びといたします。

粘り強く平和的な解決に向けて 努力できる人間を育てること

武田 洋（前 太白小学校）

私は、37年間の教員生活で、様々な学校現場を経験してきました。それぞれの学校とその地域に、これまで培われてきた文化や伝統があります。その上に乗って子供たちは生活し学んでいると強く思うようになりました。

さて、そこを踏まえてどんなことをするか、と暗中模索をしながら学校運営に関わってきました。目の前にいる子供たちがどのような人間に育ってほしいか、学校教育目標に自分の思いを込めて、自分なりのめあてをつくっていました。

担任時代から大事にしてきたことは、純粋な人間関係ができた喜びと、できた・分かったという喜び、この二つの喜びが成長の源泉であると考え、それらのできるだけたくさん子供たちが積み重ねられるように、より良い指導を目指して努力することです。それに相手を思いやる気持ちを持てるような人間を育てるということです。それらは、ささやかなことかもしれませんが、どこへ行っても指導者が持つ根っことして必要なことだと今も思っています。

世界の情勢がいろいろなところで怪しくなっている今こそ、一人一人の違いを認め合い、折り合いを付ける発信力と強い意思が必要だと感じています。粘り強く平和的な解決に向けて努力できる人間を育てることが私たちの使命だと思います。

スローガンに思いを込めて

菅原 幸二（前 折立小学校）

振り返れば、激動の5年間でした。赴任した平成24年度は、折立中学校での間借り生活を終え、中学校敷地内に建てられた仮設校舎での学校生活がやっとスタートした時でした。それでも学習環境は大きく改善され、復興に向けての大きな一歩を踏み出した時期でもありました。

子供たちは、底抜けに明るく元気いっぱいの笑顔で私を迎えてくれました。中学校職員と小学校職員の連携のすばらしさや、PTA及び地域の方々の支援によるものだと感じました

引き継いだ学校要覧には、「震災を乗り越え、たくましく明るく元気な学校」というスローガンが掲げられていました。平成24・25年度の2年間は、このスローガンを学校経営の軸として、朝会や職員会議で校長の思いを伝えてきました。

滑動崩落した地域の改修工事が進み、元の校舎に戻った平成26年度からの2年間は、スローガンを「復興への感謝の気持ちを忘れず、全力前進」としました。震災前に行っていた教育活動の全面復活と、多くの方々の支援を受けて現在に至ることについて理解を深めることに努めました。

平成27年度には、ネパールで発生した大規模地震への復興支援活動を学校挙げて取り組みました。

そして平成28年度はスローガンを「つなげよう、復興への感謝の気持ち」とし、これまでいただいた支援に対して、感謝の気持ちを持ち、行動できる子供の姿を目指した方針のもと、教育活動を行ってきました。

この5年間の勤務の中で、様々な思いが頭をよぎりますが、PTAや地域の皆様、そして教職員に支えられ、微力ながら学校責任者として務めを終えることができましたことは、本当に感慨深いものがあります。

校長が変わると学校が変わるとよく言われますが、誠意と信念をもって、いろいろな方面から校長の思いを職員へ繰り返し伝えていくことが大切だと思っています。



地域とともに…

河原木 美智也（前 立町小学校）

三つの小学校で校長を務めた。運良く、小規模校、標準規模校、大規模校の三つを経験することができた。それぞれの苦労や利点はあるが、特に小規模校では、校務分掌や地域連携、調査報告業務等で、一人当たりの役割が相対的に多くなる、学校予算も規模に合わせた配当額で備品購入や修繕が思うようにいかない、などのデメリットが目立った。今後、児童生徒が学校規模で損をすることのないよう望む。

校長として着任した最初の学校は教諭時代にお世話になった学校だった。1年目が終わろうとする3月11日に東日本大震災が起きた。幸い体育館は被害を免れ避難所としての役割を果たすことができた。連町会長さんはじめ地域の方々と信頼関係にあったことが避難所運営をスムーズにさせた。4月中旬まで避難所開設は続いたが、何よりも学校・子供たちを大事に思ってくださり、地域の組織力・団結力に助けられた。日頃の交流が大事であると痛感した。

最後に、管理職の心得として一言。多くのベテランは、自分はこれまで教育のために力を尽くし実績を残してきたという自己認識を持っているものだ。それが心の支えやモチベーションになっている。管理職はこのことをしっかり認めて接するように心掛けたい。自分は貢献できていると実感できているベテランは、余力を残して花道を飾るようである。

地域とともに歩む学校

鈴木 茂美（前 根白石小学校）

「豊かな自然に囲まれ、市内唯一の木造校舎で伸び伸びと学ぶ素直な子供たち、教育活動に協力を惜しまない保護者や地域の皆様、そして担任の枠を超え、子供たち一人一人に声を掛け、温かく見守っている職員とともに、充実した日を過ごしています。」

この文章は、根白石小に着任した1年目に、ある冊子に寄稿した文の一部である。根白石小での4年間、保護者の皆様や地域の方々、そして苦楽を共にしながら、子供たちと真摯に向き合ってきた同僚の先生方に支えられながら、何とか重い職責を終えることができたことにほっとしている現在である。

長かった教職生活を振り返ると、やはり東日本大震災が忘れられない。震災直後、2,000人もの避難者が押し寄せ、長く避難所が開設されていた学校に勤務していたが、避難所運営に地域の協力があまり

得られず、この時ほど地域と連携した防災組織体制の必要性を感じたことはなかった。その思いを胸に校長として着任したが、震災被害がほとんどなかった根白石地区は、更に防災意識が薄く、市民センターと連携して地域防災訓練を新たに提案したものの、町内会の理解が得られず実現できなかった。

地域とともに歩む学校として、より具体的で実効性のある防災計画を、学校と地域が一体となって立案することの重要性を感じた 4 年間だった。

変わらぬ「子供の笑顔」のために

岩槻 啓子 (前 通町小学校)

東日本大震災から20日後の4月1日が私の校長としてのスタートでした。プレハブ校舎の天井は蛍光灯ごと落下し、子供たちのランドセルが床に散乱していました。そして壁が所々落ちている体育館には着の身着のまま自衛隊によって助け出され避難している人々がたくさんいました。ここから4月21日の始業式までの苦闘の日々が今でも忘れられません。始業式・入学式で子供たちの笑顔に出会えたとき、心からほっとしたことを思い出します。

今学校はいろいろな役割を担っています。来たるべき新学習指導要領に向けての新しい取組。震災以来ますます重要になっている地域との連携や防災教育。カリキュラムには多方面にわたる教育活動が網羅されています。が、学校が守るべきものは「子供たちの笑顔」だと、この震災を通して強く感じました。「学校に子供たちの笑顔がある」という当たり前のことが断たれたとき、それを取り戻すために皆が必死で動きました。

シンプルなことですが私たちはそのために日々努力し続けてきました。そして、これからも同じです。しかし、それは校長一人でかなうものではありません。「チーム学校」を合い言葉に、どんなときも「子供の笑顔」のために今やるべき事に真摯に向かっていていただきたいと願っています。

S 校長先生から 教えていただいたこと

栗林 八重子 (前 北六番丁小学校)

私が初めて教頭職に就いた年、S 校長先生から管理職としての考え方や様々な場面での具体的な対応方法などをたくさん教えていただきました。そのことは、その後の学校経営にも生かし続けました。

例1:「校長と教頭の意思疎通が良いと、職員室や校内がうまく回ります。職員室の中での校長と教

頭は、家の中の父母のような存在で、その二人の在り方が教職員や子供たちの日々を左右することが多いのです。」と話され、休み時間や放課後には職員室の席で笑顔で楽しい話をしてくださいました。

例2:「校長不在時に事案が発生し緊急に対応しなければならない時は、教頭先生が職員と相談して迷わずに何らかの手を打ってください。その後のことは、戻った校長が対応します。その状況下で手を打った内容は、正しいのです。」とも話してくださいました。新任教頭にとっては大変心強い言葉で、自信を持って積極的に対応することができたのを記憶しています。校長室に行くとS校長先生は、いつも笑顔で職員を迎えてくれたり、様々な場で職員を褒めたり感謝の言葉を伝えたりしていました。児童や保護者の前で児童の姿を褒めながら職員についても褒めていました。このようなことが学校経営の基本にあることで職員は安心し、意欲的に日々の職務に励むことができるのだと強く思います。

昨日と違う自分に出会うために

伊東 智恵子 (前 台原小学校)

学校や社会では、多くの人が集まる分、自分と周りの人を比べてしまう事があります。「うらやましいな…自分より上手だな。」校長は孤独だと初任校長研修会で話されたことを思い出します。しかし、地区校長会に参加すると学校での緊張感が解きほぐされ、素の自分になれたことを心から感謝しています。いろいろ話をするうちに、自分だってやれることを一生懸命やったんだから、これでいいさ。と納得し明日への意欲を持つことができました。

いよいよ新しい生活が始まります。どんな場所であっても、全ての子供の健やかな成長を願いながら活動していければと考えています。先輩の言葉です。「全て完璧にできる人はいないよ。だからこそ助けてくれる人に感謝しなくちゃね。一生懸命やったんだったらそれで良いんだよ。今の力でこれが最高!」

大事な事は、進歩すること。昨日の自分より一歩前に進むこと。そうすればきっと、いつか自分も人の為になることができるのだと思います。たくさんの出会いに感謝し、これからも微力ながら子供たちの未来を見守っていきたいと思います。



一人一人を生かすこと

森屋 勝治（前 七北田小学校）

私が先生方に願ひ続けたことは、「教員として自己実現してほしい。」ということでした。自己実現とは、何のために教員になり、どんな子供を育てたいのか、はっきり見つめることから始まるように思います。一人一人の教員自らが、地域の環境と子供たちの実態を見つめてこそ、子供を真ん中にした教育実践が生まれるのだらうと思うからです。

地域社会との関係性を将来にわたって継続し、つないでいくことはとても大事になることです。そのための世代交代の課題にこたえる体制作りも欠かさないことになるでしょう。学校は教員の夢を実現する場でもあります。震災の年に校長になりましたが、震災を経験して校長としての立ち位置が明確になった思いがあります。「一人一人の教員を生かす校長でありたい。」と思い続けた管理職時代でした。

国語研究部会では、震災記録集・作文宮城65号特別編「あの日の子どもたち」第2集を発刊しました。微力ながら編さんにかかわり、5年の節目に出すことができました。10年目には第3集をと期待するところです。第1集と同様に第2集を手にとっていたきたいと思います。そして経験した者として伝えていってほしいと願います。

多くの校長先生方にお世話になりました。御活躍を祈ります。

ジーコの言葉に学ぶ （献身・誠実・尊重）

狩野 孝彦（前 市名坂小学校）

私は平成20年度から9年間仙台市小学校長会にお世話になりました。校長会に育てていただいたという感謝の気持ちでいっぱいです。お世話になった先生方に感謝の気持ちを込めてお伝えしたいことは、ジーコの言葉です。ジーコはプロとしての心構えを三つの言葉「献身」「誠実」「尊重」で表しています。この考え方は校長会に通じると信じています。仕事が上手いとか、どうしても許せない人がいるとか、とても自分には無理、これ以上、我慢できない！と思うような出来事があっても、それは今の自分の考え方がそうだということに過ぎないのかもしれない。視点を変えれば、その出来事に対しては、他の考え方もきっと見つかるでしょう。そんな時でも誠実に向き合い献身的に努力すれば、道は開けます。「あらゆる成功は行動なくしてはあり得な

い」という言葉もあります。前向きというのは、そういう発想の柔軟性ではないかと思います。私は校長自身がそれぞれの学校で、太陽のごとく明るく元気に児童・保護者・地域・教職員を尊重し接することができれば、それ以上の温かさ優しさで協力していただけると信じていました。校長先生方には太陽のような存在でいていただきたいと願っております。校長会のますますの御発展をお祈り申し上げます。

2年間で感じたこと

高橋 鋼（前 幸町南小学校）

2年間の校長生活。落ち着いた雰囲気のある学校とチームでまとまっている教職員の協力のおかげで、何とか教職生活を終えることができた。

本校は、東側の市営住宅は全面建て替え、西側には復興住宅と被災した児童や保護者がいるものの、被災に伴う問題は少ない。子供の変化に早く気付き対応し、それを全教職員で共通理解できていると感じている。

この2年間を通じて感じたことは、学校経営には、校長のリーダーシップはとても重要ではありますが、校長も常に教職員はもちろん、地域や保護者そして子供たちに支えられているという意識を持ち続けなければならないということです。

「チーム学校」と最近よく言われますが、「チーム学校」を実現することは容易ではありません。

日々起こるいろいろな問題場面で、校長そして教頭がどのように行動し、助言や指導ができているのか、教職員の声や悩みを受け止めて接しているのかが問われてきます。校長は、管理の面ばかりでなく生きている人間を相手にしているということを忘れてはならないと、当たり前ではありますが痛感しました。

最後に、教育を取り巻く環境は厳しくなる一方ですが、校長先生方も教職員も健康に留意され、仙台の教育が更に充実・発展することを願っています。

子供のためにも健康で

長谷 一哉（前 原町小学校）

教員になった当初は、放課後になるとバレーボールや野球の練習をしたり、時には他校の先生方と試合をしたりもしていました。かと言って、子供たちを放っていた訳ではなく、課外活動ではスポーツ教室の指導も行っていました。日曜日は試合が入り休

めない時もありましたが、それでも心身はすこぶる健康だったように思います。今の教育現場では考えられないようなゆとりがありました。

まもなく告示される次期学習指導要領では、「何ができるようになるか」が重視され、「主体的・対話的で深い学び」が求められるようです。特別な教科「道徳」、外国語の教科化、加えて授業時数増。これらはすべて「カリキュラム・マネジメント」として現場で工夫。思わずム、ム、ム!!

今でも先生方は十分頑張っているのに、更なる頑張りが求められます。加えて、多忙化の解消も。ある知り合いの方が「子供は教員にしたいくない。だって、とても大変になるから。」と言っていました。思わずうなずく自分がいました。

教師は一日 6 時間も試合をするアスリート。体調が良くなければ良い試合はできません。校長先生方も教職員もコンディションが大切です。教育効果を求めるならなおさらです。間違っても倒れるまで頑張らないでください。みなさんの健康を願います。

子供の姿を見つめて

大泉 淳一（前 南小泉小学校）

『『少しだけ力を貸していただけませんか。』津波被害から逃れて、荒浜から避難されてきた方のこの言葉から始まったのが、南小泉小学校のスマイルコットンプロジェクトです。』と着任したときに聞きました。

海水（塩分）の被害にあった土地でも育つ強さが、綿花にはあるそうです。荒浜の方々は、復興へのきっかけとして 1 年だけ力を貸してもらえればという思いだったそうです。それが、ずっと引き継がれてきました。いつまで続けようかという話もあったそうですが、子供たちそして先生方の思いが継続につながってきたのだと思います。

小学校である震災を経験した当時の 1 年生は卒業し、今年度入学してきた児童は震災の年に生まれた子供たちです。教職員も少しずつ代わり、南小泉小学校のスマイルコットンプロジェクトの始まりを語るができる者も少なくなってきました。来年度入学してくる児童は、震災については何も知りません。何を伝え、どんな子供を育てていくのが改めて問われているような気がします。私自身は、震災当時の自校の様子を知ることから始め、何が必要なのかを考えました。

復興に限らず、自校の子供の姿をしっかり見つめて学校経営に当たることを願っています。

「おかげさま」、「おたがいさま」の 思いやり

高橋 智男（前 七郷小学校）

校長として、最後の 2 年間、七郷小学校に勤務し防災・安全教育の研究指定校に携わせていただきました。あの震災の発生時には、中田小学校に勤務していました。その当時に思ったことは、「子供たちは避難訓練の時と同じように行動をする」ということです。日頃の避難訓練の大切さを再確認しました。そして、たくさんの防災・安全教育の実践に関わり、その大切さ・必要性を一層痛感しています。

地震に限らず、いつ自然災害に見舞われるか分かりません。子供の時から「自助」、「共助」の資質・能力を蓄え、大人になって、その学びが生かされ、地域社会を支える一員になってくれることを願っています。

子供たちの学びを深めるには、教職員一人一人が、力量を発揮し、一丸となって取り組んでこそ、成果が上がるものだと思います。そのために、働きがいのある環境づくりを行うことが校長の努めと考え、日々取り組んできたつもりです。また、教職員が「おたがいさま」、「おかげさま」の人を思いやる人間関係を構築することが、何よりも大切なことであり、子供たちもそのような教職員の姿を見ています。

結びになりますが、これまでに会ったたくさんの諸先輩方、同僚の皆さんに支えていただきながら、何とか務めることができました。御指導・御支援に心より感謝申し上げます。

先輩、そして仲間へ感謝

橋本 光一（前 袋原小学校）

これまで多くの御指導をいただきました仙台市小学校長会の先生方に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

児童数 1,000 人を超える原町小学校が、私の教員生活のスタートでした。新任教員としての心構え、授業の進め方、保護者対応の在り方など、厳しく厳しく、そして時には優しく御指導してくれたのは、先輩の先生方でした。その時の御指導があったからこそ、ここまで勤めることができたと言っても過言ではありません。感謝の気持ちで一杯です。

特に忘れられないのは、教頭時代です。初めて教頭になったときは、一番の不安を感じていました。しかし、お仕えた校長先生からは、「力を合わせて一緒にやろう。」と掛けていただいた、最初の

その言葉がうれしくて、今でもはっきりと覚えています。

また、校長職を拝命し、7年間の月日が経ちました。近隣の校長先生はもちろん、多くの先輩から助言をいただき、様々な問題を解決することができました。たくさんの仲間にも、感謝しきれないぐらい助けていただきました。

今、静かに教員生活を振り返る時、誰よりもたくさんの方々に助けられ、教員生活に幕を下ろすことができることを幸せに思います。

仙台市小学校長会のますますの御発展と皆様の御健康を心から祈念しております。

学び続ける大切さを実感して

深堀 道哉（前 西多賀小学校）

金融機関に勤めていた私が教師を目指したのは、社会人になって10年目を迎えた頃でした。その動機は、日々の業務を通し、「教職とは、子供たちを育てる目標に向かい、純粋に打ち込むことができる仕事である」と実感したからです。実際に教職に就いて思ったことは、人を教育するためには、自分自身が成長していかなければならないということでした。退職の時を迎え改めて思うことは、教職とは人を育て導くすばらしい仕事であるとともに、人との触れ合いから、実に多くのことを自分自身も学ぶことができるものだということです。

私は、このような学びを、校長として学校経営を進める上で大切にしてきました。それは、学び続けることが、固定観念にとらわれない柔軟な対応力を生み出すものと考えたからです。校長自身が経験を通して視野を広げていくことが、組織力向上にとり欠かせないものだと思います。

私が校長として重視してきたことは、個々の職員の力を引き出すことです。十分ではなかったと反省していますが、自分から全職員に話し掛けるように心掛けてきました。会話を通した相互理解が、人のやる気を引き出し、自己研さんに結び付くと考えています。私自身、校長会会員の皆様を始め、多くの方々に学ばせていただいたと感謝しています。

未来を創造する子供たち

横山 美喜子（前 南材木町小学校）

新任校長としての1年がもうすぐ終わろうとしていたあの日、私は、松陵西小学校の校長でした。震災からの復興と統合に向けて、それからの2年間は

無我夢中でした。そして南材木町小学校に転勤となって4年。防災教育をいかにカリキュラムに位置付けるかを追求する一方で、復興支援としての合唱団・吹奏楽団のコンサートの開催や、「世界に一つしかない自分だけの硯を作ろう」という「マイ硯」の取組を通して、雄勝硯との連携も重ねてきました。

復興はまだ道半ばです。産業の回復の遅れやそれに伴う人口の流出。その結果コミュニティは崩壊し、伝統文化も衰退していく。東日本大震災は、東北地方が包含していた大きな課題を一気に表出させたとも言えるでしょう。私は、今、私たちに課せられているのは、未来を創造する子供たちを育むことだと思います。地域を愛し復興させたいという熱い思い、新しい町の形を考える柔軟な発想、その実現に向けて見通しをもって創り出す力。真にクリエイティブな人材こそ、今求められているのだと思うのです。

持続可能な社会とは、「よさや美しさ」という価値観を共有し、それに向かう意思を持つ子供たちが創り出す社会だと思うのです。

覚悟して事態に向き合う

佐々木 弘幸（前 中田小学校）

東日本大震災発生の日、私は、八木山南小学校の教頭であった。校舎からは仙台平野、太平洋が一望できる。あの日、長い揺れの後、校舎の被災状況を確認中、最上階の窓から迫り来る津波を直接見ることとなった。沖合の白い破線が海岸部に近づくにつれて白い帯となり、防砂林をなぎ倒していくのが見えた。この日、被災3県で131校が津波に襲われ、大川小学校では児童74名、教職員10名が亡くなった。

学校がすべきことは、過去の災害を教訓として、命を守ることを最優先とした防災教育を展開し、緊急時に迅速な避難行動がとれるようにすることである。校長は「正常化の偏見」を払拭し、情報の把握に努め、臨機応変に判断・指示しなければならない。判断に悩むときには「悲観的に準備すること」を選択する。急ぎ決断を迫られる状況下では、協議するのではなく、トップダウンで動く必要もある。命を守るために、覚悟して不測の事態に向き合わなければならない。

山元町立中浜小学校での事例からは学ぶことが多い。瞬時の判断で校舎屋上の屋根裏部屋に避難し、4回の津波に耐えた。印象的なのは、校長が伝えた「今」と「これから」についての言葉である。一言で全員の気持ちが一つになった。「今夜はここに泊まります。食べ物はありません。水也没有せん。と

でも寒くなります。でも頑張ろう。暖かい朝日は必ず昇るから。」と。

老兵は死なず、 ただ後を託するのみ

佐藤 朗 (前 栗生小学校)

仙南の山の分校からスタートした私の教員生活は、12校目の学校を最後に終える。「大過なく」という言葉はあまり好きではなかったが、正直なところホッとしている。何人かの校長を退職時に見送ったが、「これからの教育界は大変ですね。」と口々に挨拶され、去って行かれた。

しかし、それは杞憂とまでは言わないが、教育課程や時代の変化に対応し、乗り切ってきたと思っている。教師の頑張りである。さて、自分が退職を迎えた今、同じ言葉を言わなければならない。違うのは、これまでのように適切に対応できるかである。授業時数が今以上に増える。教材研究や次の日の準備をする時間は、ますます削られる。小学校は空き時間なく全教科を教えるのに、である。長時間労働の問題は、学校だけは例外なのだろうか。さらに、外国語が教科となる。それを想定してこなかった年代の教師には、付け焼き刃の研修では、何ともならない。疲弊、崩壊という言葉が頭をよぎる。教師が元気でないと、子供も元気になれないはずだ。

学生の頃、何を学んだかは覚えていないが、ある教授の言葉「この仕事で大事なことは、子供と教師と一緒に笑顔でいられること。」は不易である。

子供も、そして先生方も笑顔で笑い合える学校経営をお願いしたい。そういった土台があって、教育という建物が、安定して上に積み上がっていく。

三つの『甲斐』と 教育者としての校長

佐藤 佳彦 (前 新田小学校)

私は、校長として「学校」のあり方を考えるとき、「子どもあってこそその学校」ということを大前提としてきました。

そして、学校経営にあたっては、「期待できるだけの価値がある」などの意味をもつ「甲斐」という言葉をふまえて、「学び甲斐」と「働き甲斐」、「協力し甲斐」の三つを重視してきました。

そのために、私は学校を預かる「管理職」としての校長であると同時に、教育理念や哲学を持った「教育者」としての校長であることを自覚し、「教育者」として子供、教職員、保護者や地域住民と共に歩み続けているということを常に自省してきました。

このことが、「子どもあってこそその学校」を創り、子供が「学び甲斐」を、教職員が「働き甲斐」を、そして保護者や地域住民が「協力し甲斐」を感じる学校であるための校長の大切な役割であったと、職を退いた今、改めて考えています。

子供が校長を慕い、教職員が校長をリーダーとして学び、保護者や地域住民が校長に信頼を寄せて『地域の核である学校』を託すのは、「管理職」としての校長に対してだけではなく、「教育者」としての校長に対してであると考えます。

今後、更に「教育者」としての役割が求められるであろう校長先生方に期待し、応援しております。

見守られている実感

今野 和賀子 (前 錦ヶ丘小学校)

錦ヶ丘小学校の開校直前、地域の方がお迎え式に向かう子供たちを詠んだ短歌が新聞に掲載された。学校宛ての手紙には、待望の小学校に対する祝福と惜しめない支援の思いがしたためられていた。その後、地域諸団体、学校支援地域本部等のしなやかな後押しがあり、様々な行事や授業、日々のHP発信等を通して、「地域の子供を地域で」育てようとする多くの方との顔の見える関係が築かれていった。

経営方針としてうたった「チームNishiki」は、子供たちを中心に保護者・地域・教師の三者で手を携え、内外の強みを生かしながら共通のベクトルで進むことを宣言したものだった。その目指すところを確かに受け止めていただき、前例にとらわれないめりはりのきいたPTA活動ができたこと。これも、推進役となった役員の方々を始めとして、会員の熱意（参画意識）と手腕に負うところが大きかった。

小学校教員の終わりに大規模新設校の学校づくりに携わることができたこと。その幸せに心から感謝したい。児童や教職員にとって、時に気持ちを奮い立たせるものは、自分が見守られている、支持されているという実感である。友達も親も、そして校長も自分を信じて期待して待っていてくれると思うとき、くじけそうになる心も奮起のきっかけを得るように思う。



新任校長所感

学 校 経 営 に 寄 せ る 思 い



新しいチャレンジを！

癸生川 義浩（生出小学校）

本校は坪沼小と統合して今年で3年目を迎えます。清らかな川が流れ、緑の木々に囲まれる自然豊かな土地柄です。また、周辺には古い城や秋保電鉄の跡が残っており、学習の素材も豊富な地域です。

今年度の学校教育目標は、「やさしく かしく たくましく ～心豊かに 自ら学び 未来を生き抜く 子どもの育成～」としました。特に学力の向上に力を入れたいと考えています。また、縦割り活動を積極的に取り入れ、関わりの多様化を図っています。協働型重点目標は「気持ちを込めた挨拶ができる」です。家庭や地域とともに、気持ちの込められた挨拶ができる児童を目指して取り組んでいます。

校長引継の際は責任の重さを実感し、不安でいっぱいでしたが、着任してからは、明るく素直な児童たち、熱い思いと行動力を持った地域や保護者の方々と出会い、不安がやる気になりました。少人数なりの難しさもありますが、新しいチャレンジをしながら、前向きでいじめのない、安全・安心な学校を創っていきたいと思います。

社会的自立をめざす心の教育を

目黒 悟（八木山小学校）

年度当初、私が今年度の学校経営の重点目標として職員に伝えたことは、「心の教育の充実」でした。

言うまでもなく、教育の最終目標は子供たちの「社会的な自立」です。小学校を卒業後、6～10年を経て子供たちは社会に飛び立ちます。今後10年の社会情勢の変化は、これまで以上に大きくて速いことが想像されます。職員には、常に子供たちの「社会的自立」を念頭に置き、指導・支援に当たってほしい

と伝えました。

社会がどのように変化しようとも、その中で、これからの子供たちが、夢を持ち心豊かにたくましく生きていくためには、「心の教育」こそが、今最も大切だと考えます。

自分の可能性に対する自信、未来を切り開く強い意志と誰とでも協力し合える思いやりと優しさ、試練やプレッシャーに負けないしなやかな忍耐力等、「心の教育」に経営の軸を置き、その充実を図り、継続することで、社会的自立のできる子供の育成を目指します。

職場の温かな信頼関係づくり

岩崎 薫（八木山南小学校）

私が学校経営を推進する上で大切にしていることは、「職場の温かな信頼関係づくり」です。職場の人間関係が和やかで、職員一人一人が充実感と所属感を持てる信頼関係こそ、学校教育目標の具現化を一層進める原動力になると考えているからです。

特に、職員室の要となる教頭先生が、日頃から明るく意欲的に職務に従事している状況を校長として感謝しています。校長と教頭の温かい信頼関係は、職員一人一人に安心感を与え、児童への適切な指導につながっています。同時に、PTAや地域との円満な関係づくりにもなっています。ややもすると、信頼関係は、甘えや馴れ合いが生じる危険性もあることを念頭に、朝早くから夜遅くまで従事している教頭先生を、校長がどのように理解し、サポートできるかが課題と捉えています。

「境遇を選ぶことはできないが、生き方を選ぶことはできる。」という言葉があります。誰からも信頼され安心感を与えられる校長となり、価値ある信頼関係の下で学校経営に努めていく所存です。

太白山に見守られて ～地域の力を生かして～

小野寺 治歌 (太白小学校)

本校のある太白団地の西側には太白山があり、常に子供たちを見守っています。また、子供たちは地域の方々にも見守られ、励まされながら素直にそして、朗らかに成長しています。

震災時は、強固な地盤に助けられ、建築物等に大きな被害こそなかったものの、ライフラインは寸断され、仙台西部丘陵地ということもあり、その復旧には多くの時間を要したそうです。その不便さに耐え、支え合いながら乗り越えた経験は、この太白学区の地域力をさらに強めたに違いありません。

学区のほぼ中央に位置している太白小学校は、地域にとっての中心であり、地域の方々は惜しみない協力を続けてくださっています。それだけ学校の教育に寄せる期待は大きいと感じています。

この期待に応えるべく、地域の方々のお力添えをいただきながら、子供たちが将来、太白の地で、仙台で、さらに広い世界で……自立し、社会のために力を発揮できる大人に成長するよう、微力ながら学校経営に邁進する所存です。

この庭に生まれこの庭に咲く

石川 裕美 (芦口小学校)

震災により大きな被害を受けた荒浜小学校に着任した平成25年、「生かされたこの命を大切に育てていなくては」と、身の引き締まる思いで児童の前に立ったことを昨日のことに覚えています。

震災にとどまらず、児童生徒に係る痛ましい事件や事故が続いている昨今、子供たちの命を守り、強い心を育てていくことの重責を実感する日々です。

芦口小学校は、近隣3校の児童の移籍によって創設された、住民待望の学校だったそうです。学区には、開校当時からずっと本校を見守り応援してくださっている地域の方々や、母校を大切に思ってくださっている保護者の方がたくさんいらっしゃいます。

芦口の方々が誇りにしている校歌の歌詞に「この庭に生まれこの庭に咲く」とあるように、様々な困難を乗り越え、子供たちがこの学びの庭でそれぞれ

に花を咲かせてくれることが、学校、保護者、地域の共通の願いです。皆さんの力をお借りしながら、心身ともにたくましい子供を育てるため、協働して学校経営を推進していきたいと思います。

折り目正しく 自ら立つ ～脈々と繋がる歴史～

菅澤 和広 (折立小学校)

その頂に雪を残す泉ヶ岳を望む職員室からの眺めに心奪われた4月から、数か月が過ぎようとしています。この間、地域や保護者の皆様、そして先輩諸氏に折立小のことをたくさん教えていただきました。私も、校長室や資料室にある文書から勉強してみました。すると…、

- ・その歴史は明治6年、本校の南にある古刹大梅寺の一室にて茂庭小の支校として始まったこと
 - ・生出小そして八幡小の分校を経て、地域の熱意ある請願を受け、昭和46年に独立したこと 等々
- 折立小は地域の力で今があることが分かりました。

初代校長 渡辺健二氏は、「折」の一字に「折り目正しく自ら立つ」との思いを込め、校章の中心に据え、節度節制ある生き方を目指すとしています。「つながろう みんなと！ つなげよう みんなを！」を今年度のスローガンに掲げました。脈々と伝わる先輩諸氏の思いを引き継いでいきます。加え、被災により校舎を離れた苦難の時期への感謝を固く胸に秘め、児童も教職員も自ら折り目正しく立ち、地域や保護者の皆様と連携をさらに密にし、人となりが、人に学ぶ教育活動を推進していく決意です。

「約束の地」に着任して

五十嵐 誓 (川平小学校)

30数年前、私は川平小近くの学校に着任した新任教師でした。若い教職員が多い職場で、川平小学区内にお住まいであった先輩教師のお宅で、有象無象、実にいろいろなことを教えていただきました。

その時に、心に刻んだのが、「よりよい教師を目指そう」という先輩の励ましの言葉です。

心に刻んだ、まではいいのですが、「よりよい教師を目指す」という問いは、考えれば考えるほど奥深い問いで、それはまるで禅問答に似ていました。20代の時は、分かりやすい授業ができる教師、30代の

時は、子供に寄り添える教師、40代では、家庭、地域とともに歩める教師と思い定め、取り組んではきたものの、そのどれもが不十分なままに、今日に至ってしまいました。

今年度末退職される先輩の先生。あの時の先生との約束は果たせないままですが、「よりよい教師をめざす」を、「よりよい学校を目指す」に置き換えることにします。それが校長として「約束の地」に着任した務めだと自分に日々言い聞かせています。

チーム根小を目指して

森 直 (根白石小学校)

根白石小学校といえば「仙台市唯一の木造校舎」が有名だが、実際にこの校舎で学んだ同窓生が今でもふるさとに関わり続けながら歴史と伝統を継承している。保護者と地域が一丸となって、学校を支援してくださる、まさに地域の人々の心のよりどころとなっている学校であり、その思いに応えていけるよう教職員も一丸となって学校経営を進めていくことが望まれている。

児童は純朴で、全校が一つの兄弟のような仲の良さである。穏やかな環境の中でふるさとを愛し、伸びやかに育っている。しかし将来に向け、心身ともにたくましく生きていくために必要な力を身に付けさせなくてはならない。そのために必要な資質・能力や身に付いている児童の姿を教職員が考え、共有し、グランドデザインに明記することで一丸となって学校経営に参画することができると考える。

このふるさとを誇りに思い、自信を持って社会で活躍していく力を持った児童の育成を使命と考え、その重責を果たすため、微力ではあるが邁進したい。

地域とともに

小原 純 (高森小学校)

高森地区は、震災時に地盤が歪み、道路も凹凸状態になってしまった所もあり、地震による影響を大分受けました。そこで、ひまわりの花で校庭をいっぱいにする「ひまわりプロジェクト」を企画して、明るい学校、明るい地域にしようと取り組みました。さらに、地域とのつながりを大切にして、地域とともに進むために、学校支援地域本部事業（すこボラ

隊）を結成しました。

震災以前から本校は、地域の方々との関わりが深くありましたが、学校支援地域本部による地域連携が始まってからは、先生方の要請に応え、授業のゲストティーチャーとして、市民センターをも巻き込んで、地域の方々の力をたくさんお借りするようになりました。連携事業も「花植ネットワーク」「地域合同防災訓練」「巣箱づくり」「畑・田んぼづくり」等から、心の教育や防災意識も地域とともに進めることができるようになりました。

今後も、地域とともに、心豊かな子供の育成を目指して学校経営に取り組んでいきたいと考えています。

保護者・地域の皆さんの 支えに感謝して

藤原 秀晃 (燕沢小学校)

本校の5・6年生は総合的な学習の時間に米作りに取り組んでいます。その始まりとなる第1回の田植えは、昭和52年5月、当時のPTA副会長さんの水田で行われました。以降、米作りは引き継がれ、もち米を育てた年は収穫祭で餅つきを体験したり赤飯を味わったりするなど、地域やPTAの方々の協力により、充実した活動が続いてきました。

昨年、ここ数年間学童農園として水田をお借りしていた元PTA会長さんが急逝なさるということがありました。米作りの学習が継続できるか懸念されていたのですが、歴代の会長さん数名と地域の方が中心となり、校地内に学習用の水田が作られることになったのです。重機での土入れや水漏れ対策など、たくさんの整備を重ねていただき、5月下旬には5年生が田植えを行うことができました。

着任直後から、学校を支えようという保護者、地域の皆さんの熱い思いと温かさを実感できました。この支えに感謝し、「地域とともに歩む学校」を目指し、学校経営に取り組んでいく所存です。

大きな花の輪まわせ

小松 英明 (将監西小学校)

本校のPTA広報誌の題名は、「花の輪」です。
「美しいものを大事にする 豊かなほんとうの人間になる 先生も子どもも円くなって みんな花の輪

まわせ 大きな花の輪まわせ」という将監西小学校の校歌の一節からの命名です。

この特徴的な歌詞は、本校の阿部一郎初代校長の「ゆったりと大らかな、しかも心の温かさとデリケートさをたっぷりもっている子ども」に育ててほしいという思いを受けて作詞されました。

知識基盤社会と言われ、加速度的に知識世界が進展していく現代では、ともすると合理性や効率性が重視されがちです。今を生き抜くためには大切なことですが、失敗しながら学ぶ子供たちには、本校校歌に込められた思いもまた大切なことと考えます。

本校の経営に当たっては、子供を中心に保護者、地域、学校が円くなって協力し合える関係を築き、ほんとうの美しさや豊かさについて語り合い、次代を担う子供たちが大らかで温かいデリケートな心を持てるように腐心していきたいと考えています。

多くの大人に見守られて

後藤 芳浩 (中野栄小学校)

震災から 6 年が経ち、併設されていた中野小が閉校になり 1 年が過ぎました。学区が震災で津波の被害を受け被災した地域でもあります。震災の記憶が薄れていっているのも事実です。

震災当時保育園の園長をされていた方から、津波で園が被災し、特に 0 歳児を必死に守ったこと、その子供たちが今年 1 年生に入学したこと、周りの大人が常に見守り、安心感を与えることが大事であることなどの話を伺いました。被災した子供たちが、どのように周りの大人に助けられ見守られてきたかを垣間見た瞬間でもありました。小学校で震災を経験した子供たちが卒業していなくなった現在、入学前の様子を知ることも必要であると感じました。

子供たちが家族や幼稚園、地域の方々に温かく見守られ成長していることを考えると、学校や家庭、地域、関係機関との連携がますます重要になってきます。

今後も、多くの大人が子供たちを温かく見守り支援していただけるように、地域とともに歩む学校づくりを基盤に学校経営を推進してまいります。

子供たちのよりよい姿の実現のため

高橋 和之 (鶴巻小学校)

朝、子供たちの明るい挨拶の音が、校舎内外に響きます。今日も一日、たくさんの笑顔が生まれることを願わずにはられません。

本校では「子供が本気になって取り組み、笑顔あふれる鶴巻小」をスローガンに、各種の教育活動を行っています。着任から数か月、これらの活動には、家庭や地域の方々のたくさんの支援が不可欠であることを、改めて実感しています。また、協働型学校評価の重点目標においては「言葉」を大切にした取組から、心豊かな児童の育成を目指しています。人との関わりや体験活動等において、挨拶、言葉遣い、思いの表出など、言葉を意識した取組を通して、温かい人間関係を構築させていきたいと思っています。

日々、手探りの状態ではありますが、子供たちのよりよい姿の実現のため、家庭や地域の方々とともに、教職員一丸となって力を尽くしていくことができるよう、学校経営に取り組んでいきたいと考えています。

「チーム幸南」を合い言葉に

菅原 邦子 (幸町南小学校)

幸町南小学校の校長として着任してから、3 か月が過ぎました。子供たちは、エネルギーに満ちあふれている、かけがえのない存在だと感じながら、毎日を過ごしているところです。

これまで保護者の方々とお話する中で、「子供たちには元気で、友達と仲良く学校に行ってほしいんだ」という思いを聞く機会がありました。子供の学校生活を心配する親御さんの気持ちがあふれている言葉だと感じました。子供たちは、安心できる環境の中であってこそ、失敗を繰り返しながら何かにチャレンジしたり学んだりすることができると思います。そのためにも、学校は子供たちにとって安心できる場所でありたいと強く願っています。

幸町南小学校では、今年「幸南スタンダード」を取り入れたユニバーサルデザインの授業づくりや防災の意識を高める授業づくりなどに取り組んでいます。

す。皆が楽しく学べる環境づくりのために、職員が心をついに「チーム幸南」を合い言葉に進んでいく学校を目指してまいりたいと思います。

校長として地域とともに

相澤 文典（袋原小学校）

本校は開校以来、地域の方々の強力なバックアップがあり、地域とともに歩んできた学校です。朝と帰りに子供たちを見守ってくださる防犯ボランティアの登録者数が227名ということからも、学校のために何かしたいという思いが伝わってきます。また、地域の方からはよく電話がきます。「危ない歩き方をしていた」「4月に学校に行きたがらなかった子が元気にあいさつして登校して行くようになった」など、良いことも悪いことも教えてください。さらに、初代PTA会長が放課後アフタースクールの運営委員長だったり、卒業生がボランティアとして手伝いに来てくれたり、本当にいろいろな方が長年にわたり学校を応援してくださっています。

新任校長として着任して3か月、まだ自分に何ができるか自信を持って言えることはありませんが、地域の方々と共に、この学校を卒業する子供たちが、将来再びこの学校のために戻って来てくれることを楽しみにして、学校経営に当たりたいと思います。

チームメイトとチームワーク

千葉 博久（中田小学校）

中田小学校には、合い言葉があります。「みんなでつくろう、明るい挨拶と、思いやりいっぱいの中田小（子どもも、親も、先生も!）」というものです。覚えやすいので、子供たちに浸透しています。

伝統ある学校ですので諸先輩により改善が図られており、良いところがたくさんあります。一方、新しい教育課程や地域の変化に合わせて改善が必要なのところも、徐々に分かってきました。良いところは伸ばし、改善が必要なところは計画を立てて変えていこうと思います。ただ、学校だけでは不十分です。

中田の子供たちは、中田で生活し、中田で育っています。家庭や地域の方々と学校が「一つのチーム」となって子供たちに関われば、子供たちは迷わず、素直に伸びていきます。それぞれの立場で具体的に関わることができるよう、この合い言葉を保護者や地域にも広げているところです。

親も地域も先生も、子供たちの健全な成長を願い、「同じチームメイト」として一緒に取り組んでいくための働きをしたいと考えています。



編集後記

震災から6年を経た今年も、復興の思いと感謝の気持ちを込めた児童生徒らによる七夕飾りが仙台の街に飾られました。街行く多くの人々が七夕飾りを見上げ、復興への思いを新たにしたことと思います。

さて、この度は、会員の皆様の御協力により、『廣瀬川』第92号を刊行することができました。本号では、「復興に向けた新たな取組を通し、未来を切り開くたくましく生きる子供を育てる学校経営」というテーマに、地域とともに、特色ある教育活動や心豊かでたくましく生きる子供の育成に取り組んでいる学校の具体的な実践を御紹介いただきました。

また、今春退職された25名の校長先生方からは示唆に富んだお言葉や、心強いメッセージをお寄せいただくとともに、16名の新任校長先生方からは、学校経営に対する決意や熱い思いを寄せていただきました。

本号が、仙台市が目指す「時代の変化を受けとめ、未来を切り開いていく力」に満ちた子供を育てることに資する学校経営の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、御多用の中、玉稿を賜りました校長先生方に心から感謝を申し上げます。

（92号担当チーフ 佐藤 記）

編集担当者：佐藤正文（岡田小） 畠山厚子（鶴谷東小） 中廣 治（将監小） 目黒 悟（八木山小）